Osaka University Knowledge Archive

Title	Life Events and Posttraumatic Stress in Hanshin-Awaji Earthquake Victims
Author(s)	權, 寧淑
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44490
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	權（ごおん）　寧（よん）　淑（すく）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学　位　記　番　号	第　１７２７７　号
学位授与年月日	平成 14 年 9 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	Life Events and Posttraumatic Stress in Hanshin-Awaji Earthquake Victims （阪神・淡路大震災の被災者における生活出来事と心的外傷後ストレス障害）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　森本　兼曩 （副査） 教　授　武田　雅俊　　教　授　杉田　義郎

論　文　内　容　の　要　旨

［目的］

平成７年（1995 年）１月 17 日に起きたマグニチュード 7.2 の兵庫県南部地震（以下、阪神・淡路大震災）では、人的被害は死者 6,500 人以上、負傷者約 45,000 人にのぼり多くの物的被害も生じた。甚大な被害が被災者の精神面に及ぼした影響も大きく、多くのメンタルケアを必要とする被災者を生み出した。このような震災ストレスは生存への脅威、財産の損失を発生するだけでなく、震災に関連したストレスフルな生活出来事を引き起こし心身の健康状態へ影響を及ぼすと考えられる。

本研究の目的は、阪神・淡路大震災の被災者における震災ストレスの健康影響を評価するために、震災により起きた生活出来事と PTSD（Posttraumatic Stress Disorder）様症状でみた精神的健康度との関係を検討することである。

［方法ならびに成績］

調査対象は阪神・淡路大震災を経験した者で、調査協力が得られた神戸市と周辺の都市および大阪市に所在する５つの製造業従業人 900 名である。1996 年２月から４月までにアンケート調査を実施し郵送にて直接回収した。その内 20-59 歳の男性 302 名、女性 78 名、合計 380 名のデータを分析した。震災に起因する生活出来事は家屋の破損、近親者の死亡、避難所生活の有無など 20 項目を選び、経験の有無および変化をもたらした程度に応じて５段階で回答してもらい得点化した。精神的健康度の評価は DSM-IV（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV）に示された PTSD の診断基準から、カテゴリ-B（再体験：５項目）、カテゴリ-C（回避と反応性の麻痺：７項目）、カテゴリ-D（覚醒の亢進：５項目）の 17 項目を用いた。各 PTSD 様症状について、症状ありを１点、なしを０点とし、PTSD 総得点（0-17 点）と３つの下位尺度の得点を算出した。併せて、人間関係を主体とした情緒的支援網（３項目）がどの程度あるのかを尋ねた。

生活出来事の経験率について主な項目別にみると、家屋の修理・転居：62.9%（男）、60.3%（女）、収入の減少：53.3%（男）、44.9%（女）、家族構成員の怪我・病気：13.9%（男）、19.2%（女）、近親者の死：2.3%（男）、5.1%（女）であった。

DSM-IV に示された PTSD の診断基準からカテゴリ-B に含まれる項目に対する回答では、外傷的出来事を象徴す

る、あるいはその側面に類似する内的・外的手がかりに暴露された時の心理的苦痛があると回答した者が男 55.6%、女 73.1%、外傷的出来事の反復的で浸入的な想起を訴える者が男 31.5%、女 35.9%と多く、外傷的出来事に関する反復的で苦痛な夢を見ると訴えた者は男 7.6%、女 10.3%と少なかった。カテゴリ-C に含まれる項目に対する回答では、未来の縮小感覚を示す者が男 19.2%、女 26.9%で、外傷的出来事を思い出させること・場所あるいは人を避ける努力をすると答えた者は男 6.0%、女 7.7%であった。カテゴリ-D に含まれる５つの項目に対する回答には大きな差がなくいずれも 20%前後の頻度が認められた。

経験した生活出来事得点は男女とも PTSD 総得点と有意に関連しており（P＜0.001）、また、再体験、回避反応および覚醒亢進の得点とも有意に関連していた（P＜0.01）。また、生活出来事、自覚的身体状態、情緒的支援網、年齢、社会経済的レベル、結婚状態を独立変数とし、PTSD 得点を従属変数とした重回帰分析を行なった。その結果、他の要因の影響を考慮した上でも、生活出来事を多く経験したことや情緒的支援の少ないことは精神的健康度の低下を招いていることがわかった。

［総括］

本研究では 1995 年の阪神・淡路大震災発生１年後に、20-59 歳の企業従業員 380 名に調査を行い、震災により生じた生活出来事と PTSD（心的外傷後ストレス障害）様症状でみた精神的健康度との関係を検討した。質問項目は生活出来事 20 項目、情緒的支援網３項目、PTSD 様症状 17 項目である。その結果、経験した生活出来事の程度は、男女対象者ともに PTSD 総得点と３つの下位尺度（再体験、回避と反応性の麻痺、覚醒の亢進）の得点に有意に関連していた。また、情緒的支援網の低い男性対象者は高い対象者より PTSD 総得点と覚醒の亢進の得点が有意に高かった。

以上の結果より、震災により生じた多数の生活出来事の経験、低い情緒的支援網は被災者の精神的健康度の低下に関与する重要な要因であることが示唆された。このことからも被災者が震災後に直面している多くの生活上の苦痛や PTSD 様症状などに対して広く支援体制を整えることが不可欠であることがわかる。

論文審査の結果の要旨

都市型社会に甚大な被害を及ぼした 1995 年１月の阪神・淡路大震災は、その被災者の精神的影響も大きく、ストレスフルな外傷的出来事として PTSD（Posttraumatic Stress Disorder；心的外傷後ストレス障害）とよばれる心身の障害を引き起こす可能性が高い。

本研究では、阪神・淡路大震災の被災者（阪神間の企業従業員）380 人に対して、1996 年２～４月に震災ストレスの健康影響を評価するために質問表調査を実施した。その結果として震災被災者の精神的健康あ度の把握に PTSD 尺度が有用であること、震災により生じた生活出来事ストレスおよび情緒的支援網が被災者の精神的健康度の有意に関与していることが明らかとなった、さらに、被災者が震災後に直面している多くの生活上の苦痛や PTSD 様症状などに対して適切な支援体制を整えることが不可欠であることが明らかとなった。

本研究は阪神・淡路大震災の被災者に対する精神的支援検討のための基礎資料として社会医学的に重要な知見を与えるものであり、学位に値すると考えられる。